KdF 余暇モデルの輸出
―南東欧における「歓喜と労働」移動博覧会を中心に―

森　　宜　人

はじめに

新生ドイツはアドルフ・ヒトラーによる政権掌握以来このかた、あらゆる創造的人間に対して喜びをもたらすという高邁な戦いに臨んでいる。この歓喜の思想を世界に普及させ得ることをわれわれは幸運に思い、またそこに喜びを見いだす。〔中略〕「歓喜と労働」博覧会を、古代オリンピックの地において初めて開催できることに私は深い満足を覚える[1)]。

これは、歓喜力行団 Kraft durch Freude（以下、KdF）ライヒ指導者兼「歓喜と労働」国際事務局 Internationales Zentralbüro „Freude und Arbeit“総裁 R・ライ Robert Ley が、1938 年 5 月にアテネで開催された第 1 回「歓喜と労働」移動博覧会の開会に寄せた祝辞である。同博覧会は引き続き同年 10 月にブルガリアの首都ソフィアで、次いで 1939 年 6 月にルーマニアの首都ブカレストで開催された。そして 1940 年にはユーゴスラヴィアの首都ベオグラードでも開催予定であったが、第 2 次大戦勃発のため実現には至らなかった。

この 4 ヵ国を含む南東欧地域は、1934 年 9 月に導入されたナチ政権の「新計画」によって構想された広域経済圏の枢要な一角を形成した。ナチ政権が発足する以前より南東欧地域との関係はいわゆる「中欧」構想のなかで重視されていたが、「新

＊　本稿は、社会経済史学会第 92 回全国大会自由論題報告（2023 年 5 月 27 日、於：西南学院大学）の報告原稿に加筆・修正を施したものであり、2020-23 年度 JSPS 科研費基盤研究（C）（課題番号：20K01788）および 2022-24 年度 JSPS 科研費国際共同研究加速（A）（課題番号：20KK0279）による研究成果の一部である。

1）　Dr. Robert Ley: Ich grüße Athen!, in: *Freude und Arbeit,* Jg. 3, H. 5（1938）, S. 4.

計画」体制の下で当該地域に期待されたのは食糧・原料の供給地と、軍需品を中心とするドイツ製工業製品の市場としての役割であった。ヴェルサイユ体制に規定された南東欧諸国とドイツとの関係は多様かつ流動的であり、また小協商体制やバルカン協商体制構築による域内の連帯が模索されたものの、相互の利害関係が複雑であったため、決して一枚岩になり得なかった。だが世界恐慌の勃発により深刻な農業不況がこの地域を襲うと、南東欧諸国は一様にドイツへの経済的依存度を高めることとなった[2)]。「歓喜と労働」移動博覧会は、「新計画」体制下におけるドイツと南東欧諸国との関係強化を余暇政策の面から促進する試みであったともいえる。

D・リープシャーの定義に従えば、国際社会政策史上の当該期は、あるべき余暇のあり方をめぐる「競合するインターナショナリズムの闘争」が展開された局面であった。その代表的なモデルとしては、アメリカ合衆国のニューディール政策、ベルギー・フランス・スウェーデンなどの社会民主主義モデル、国際労働組織 International Labour Organisation（以下、ILO）の社会工学モデル、ソ連の集産主義モデル、そして、独伊の全体主義モデルがあげられる。いずれのモデルを標榜する国々も国際的イニシアティブの掌握につとめたが、なかでも全体主義モデルの特性は、ILO をはじめとする国際組織や国際会議などに影響力を及ぼすだけでなく、独自の国際会議・委員会を立ち上げ、既存体制の変革をはかるばかりか、その弱体化と、最終的には自らがヘゲモニーを握る新たな体制の構築を画策したことにあった[3)]。「歓喜と労働」移動博覧会は、こうした「競合するインターナショナリズムの闘争」のなかにおいて KdF の優位性をアピールするための重要なプロパガンダ手段として位置づけることができる。

互いにしのぎを削った多様な余暇モデルのなかで、当時、国際的に最も大きな注目を集めたのが KdF のそれであったあったことはよく知られている。だがリープシャーによれば、1933年にドイツ労働戦線 Deutscher Arbeitsfront（以下、DAF）の下部組織として KdF が設立されたことは、「ナチスの余暇イデオロギー

2）ナチ政権の「新計画」体制についてはさしあたり、次の研究を参照：Dafinger（2017）、Elbert（1999）、栗原（1994）。
3）Liebscher（2009）, S. 18f.

の独自性の発露というよりは、ファシズム・イタリアのイメージ戦略の帰結として捉えるべき」である。というのも、そもそもKdFが1925年に発足したファシズム・イタリアの余暇組織ドポラヴォーロOpera Nazionale Dopolavoro（以下、OND）を模倣して設立されたためであり、また、ONDの活動がファシズム・イタリアの国際的レピュテーションの向上に寄与したためである[4)]。こうした視角よりリープシャーは、KdFとONDの共通点や類似性のみならず、両者の両義的な関係性、すなわちヨーロッパ諸国への全体主義余暇モデルの輸出をめぐる角逐と、ILOをはじめとする反全体主義勢力に対抗するための相互交流とに光を当てた。

KdF史の先駆的研究に位置づけられるW・ブッフホルツの研究をはじめとして、KdFの余暇プログラムはナチ・イデオロギーの教化や、労働者層の支持獲得のためのツールとしての効果を相対化する研究が数多く蓄積されてきたが、他方で、KdFの対外的側面についてはほとんど言及されることがなかった[5)]。ゆえにKdFとONDの関係に焦点をあてたリープシャーの研究は、それまで一国史的な視座に限定されていた研究史に対してトランスナショナル・ヒストリーの視角を導入することにより研究の地平を拡大するのに寄与したといえよう。しかしながら、ナチ政権の対外戦略において南東欧諸国との関係はベルリン・ローマ枢軸に劣らず重視されたにもかかわらず、当該地域におけるKdFのプロパガンダ活動の実態に関してリープシャーは掘り下げた分析を行っていない。

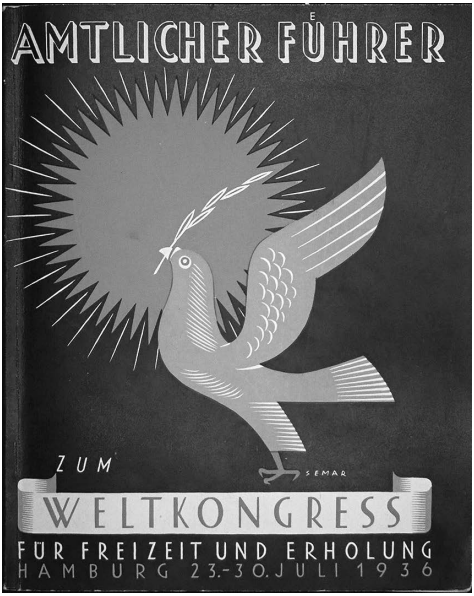
以上の先行研究の動向をふまえ、本稿では、「歓喜と労働」移動博覧会を主たる手がかりとしてKdFの対外プロパガンダの実態を考察し、両大戦間期ヨーロッパにおいて余暇の組織化が共時的に展開しえた要因の一端を明らかにすることを課題とする。分析には主として、ドイツ連邦文書館ベルリン・リヒターフェルデ、ドイツ連邦外務省政治文書館、ハンブルク州立文書館に所蔵されている未公刊史料を活用する。

4） Liebscher（2009）, S. 53f.
5） Baranowski（2004）や、Buchholz（1976）、Weiß（1993）など。また近年のKdF史の研究動向については、小野寺（2020）や、河合（2015）、森（2021）などを参照。

1. 第2回世界リクリエーション会議と「歓喜と労働」国際事務局

KdFを通じたDAFの対外戦略の起点となったのは、1936年7月23日から30日にかけてハンブルクで開催された第2回世界リクリエーション会議The Second World Recreation Congress（以下、WRC）である。同会議の会期は、同年8月に開催されたベルリン・オリンピックの直前であったばかりでなく、同年6月の第20回ILO総会の直後のタイミングでもあった。ILO加盟国の間では、この時までに商工業セクターの従業員が年間6日以上の有給休暇を取得することが標準化されており、第20回総会では、有給休暇の適用範囲を家事使用人や、家内労働者、農業労働者などこれまでその恩恵に与ることのできなかった層に拡大することを求める勧告が採択された。同勧告によりフランス人民戦線政府やベルギーの挙国一致内閣は有給休暇の立法化を進め、立法化の果たされなかったイギリスでもこれが広範な議論を喚起する契機となった。他方ドイツでは、休暇法を求めるライの度重なる働きかけにもかかわらず有給休暇の法制化が果たされることはなく、有給日数は各事業所単位でDAF労働管理官によって定められた。このようなタイミングで開催された第2回WRCは、余暇の制度化においてILOの後塵を拝したDAFにとって、そのプレステージを回復させるための重要な機会でもあったといえる[6)]。

図1　第2回WRC公式ガイドブック表紙



出典）Deutscher Organisations-Aussschuß des Weltkongresses für Freizeit und Erholung（1936）, Weltkongress für Freizeit und Erholung. Hamburg vom 23. bis 30. Juli 1936.

6）Liebscher（2009）, S. 488-493.

1932 年の第 1 回 WRC がロサンゼルス・オリンピック開催を契機として同市で開かれたのに対して、第 2 回 WRC の会場に選ばれたのは、オリンピック開催地のベルリンではなく、ドイツ第 2 の大都市にして、ヨーロッパ有数の港湾都市ハンブルクであった。ハンブルクは、KdF の余暇プログラムのなかでも最も大きな注目を集めた KdF 船によるクルーズ旅行の発着地であるだけでなく、すでに 1935 年に第 1 回 KdF 全国大会の会場にも選ばれ、「KdF 都市」の名称を与えられていた。第 2 回 WRC の会場にハンブルクに選ばれたのは、こうした「KdF 都市」としての役割に負う所が大きく、また同会議は第 2 回 KdF 全国大会としても位置づけられたのである [7)]。

表 1　第 2 回・第 3 回世界リクリエーション会議（1936/38 年）の分科会構成

第 2 回ハンブルク大会（1936 年）	第 3 回ローマ大会（1938 年）
1. 余暇の社会的課題―官民のイニシアティブ―／余暇の国民経済的意義	1. 「労働と歓喜」運動の発展と形態
2. 余暇運動の特質と組織形態	2. 諸国民の生活における「労働と歓喜」―社会経済的諸前提―
3. 国土計画問題／職場美化が人間とその居住文化に及ぼす影響	3. 国土計画と「労働と歓喜」運動
4. 週末／休暇とリクリエーション／創造する人々にとっての身体鍛錬の意義	4. 国民の健康に資する「労働と歓喜」
5. 女性の余暇	5. スポーツと身体鍛錬
6. 児童及び青少年のための余暇	6. 有給休暇に焦点をあてた愉悦
7. 余暇と労働の基本的関係／文化芸術に対する労働の影響／労働と民族文化の関係	7. 「労働と歓喜」と諸民族の文化
	8. 女性の生活における「労働と歓喜」
	9. 青少年の生活における「労働と歓喜」
	10. 諸階級の社会的機能としての「労働と歓喜」―下層階級の精神的・物質的生活水準向上の手段を中心に―
	11. 社会的平和の保たれた諸国民間の相互協力理解の手段としての「労働と歓喜」運動―文化交流及び相互訪問―

出典） Internationales Zentral-Büro “Freude und Arbeit” (1937), S. 32-37; Internationales Zentral-Büro “Freude und Arbeit” (1938), S. 1-15.

表 1 に示したように、余暇の組織化をめぐる国際討議は、本会議場と 7 つの分科会において並行して進められ、61 ヵ国から派遣された 3,000 人以上の余暇政策関係者がこれに参加した。各国代表者が国際討議のため行った報告の数は 141 にのぼった。KdF 関係者を含むドイツ代表は本会議およびすべての分科会に登壇

7） Mori (2023), p. 179.

し、その報告数は 61 を数えた[8)]。

例えば、「余暇設計の文化的意義」と題する本会議報告を行った KdF 全国部長 H・ドレスラー＝アンドレス Horst Dreßler-Andreß は、世界各国で展開されている余暇の組織化の共通点を「幸福と生活感情の調和を望む意思」に求め、KdF の活動を通じて、ドイツ国民が「放埒な余暇の浪費」に走ることなく「有意義な余暇利用のための共同体形成」に成功したことをアピールした[9)]。ドレスラー＝アンドレスの報告に典型的にみられるように、ドイツ代表の報告は KdF の成果を誇示するものがほとんどであった。

ドイツに次いで報告者数が多かったのはイギリス（11 名）であり、これにイタリア（7 名）と、ギリシアおよびポーランド（各 6 名）が続いた。ドイツとイタリアを除くすべての報告者を地域別に区分すると、西欧（イギリス・フランス・ルクセンブルク・スイス・ベルギー・アイルランド）23 名、東欧・南東欧（ポーランド・ギリシア・ハンガリー・ルーマニア・オーストリア・チェコスロバキア）22 名、北欧（ノルウェー・デンマーク・スウェーデン・フィンランド）6 名、北米および中南米（アメリカ合衆国・アルゼンチン・メキシコ・ブラジル・チリ・ウルグアイ）15 名、アジア（日本・中国・インド）7 名となる[10)]。ドイツとの地理的な近さも考慮に入れる必要はあるが、東欧・南東欧諸国は、KdF と競合する余暇モデルを展開させている国の多い西欧に匹敵する数の報告者を派遣しており、当該地域における余暇の組織化に対する関心の強さがうかがわれる。

会期中のハンブルクでは、余暇の組織化をめぐる国際討議と並んで、各種スポーツ・プログラムや、民族舞踏、祝祭パレード、国防軍の閲兵式、親衛隊（SS）および突撃隊（SA）による馬術大会、ヒトラー・ユーゲントの野営大会など余暇にまつわるさまざまなイベントが市内各所で企画され、これらのイベント参加者も含めてドイツ国内外より約 150 万人（内 80 万人が国外より）の人びとを集めた[11)]。そして 7 月 30 日の最終日、次の一般決議の採択をもって第 2 回 WRC は閉幕した。

8） Internationales Zentral-Büro „Freude und Arbeit“（1937）, S. 38-64.
9） Internationales Zentral-Büro „Freude und Arbeit“（1937）, S. 70f.
10） Internationales Zentral-Büro „Freude und Arbeit“（1937）, S. 38-64.
11） 第 2 回 WRC の概要については次の文献を参照：Linne（1994）, Tanao（2010）, Mori（2023）, 田野（2009）.

(1) WRC 国際評議委員会を存続させるとともに、同委員長にアメリカのナショナル・リクリエーション協会 National Recreation Association 理事 G・T・カービー Gustav T. Kirby を、同事務総長に DAF 幹部としてドイツへの第 2 回 WRC 招致につとめた A・マンタイ Arthur Manthey を選任する。

(2) 常設機関として WRC 国際中央事務局をベルリンに設置し、同総裁にライを任命するとともに、必要な一切の細目を定める権限を付与する。また同事務局に国際余暇問題研究所を附属せしめる。

(3) 第 2 回 WRC 会議参加国を含むあらゆる国々に国際評議委員会に委員を参加させる機会を与える。申し込みの対応には、国際評議委員会事務総長マンタイがあたる。

(4) 第 3 回 WRC を 1938 年にローマで開催する。その準備のための執行委員会を設置し、同委員長にはイタリアの OND 指導者 C・プッチェッティ Corrado Puccetti を任命する（委員はドイツ、イギリス、フランス、スカンジナビア諸国、ラテン・アメリカ諸国、インドからの代表各 1 名によって構成）[12]。

また第 2 回 WRC の閉幕にあたり、ライは次のように自らの所信を表明した。「最後に明らかにしておきたいことは、われわれは新たなインターナショナルを形成することを望んでいないということである」[13]。「われわれの望みは、歓喜の世界同盟 Weltbund der Freude を形成することにある。それは、われわれが平和に向けて世界を結びつけることを希求するからである」[14]。

「歓喜の世界同盟」とはいかなる組織として構想されたのか。この点についてライは具体的に明言しなかったが、WRC の「常設機関」としての国際中央事務局が「〔余暇に〕関連する諸問題に取り組み、〔余暇に関する〕経験交流に配慮すること」が期待された[15]。他方でライは、諸国間の平和を実現させる手段として、余暇を利用した「大衆外交」を促す「諸国家間の休暇協定」[16]の重要性を訴えた。す

12) Internationales Zentral-Büro „Freude und Arbeit“ (1937), S. 31.
13) Freizeit – Kundgebung und Kongreß, in: Frankfurter Zeitung vom 28. Juli 1936; Linne (1994), S. 174.
14) Weltbund der Freude, in: Der Angriff vom 28. Juli 1936.
15) Freizeit – Kundgebung und Kongreß, in: Frankfurter Zeitung vom 28. Juli 1936.
16) Freizeit – Kundgebung und Kongreß, in: Frankfurter Zeitung vom 28. Juli 1936.

なわち、「ドポラヴォーロがアルプスを越えてバイエルンを旅するとき、KdFがリヴィエラ旅行に向かい」、「われわれがパリに向かう折に、フランス人が征服者としてではなく喜色満面のゲストとしてライン川を訪れる」こととなれば、「恒久的な世界平和に向けて大きく前進することができよう」[17]。

ハンブルクでの一般決議によって発足し、ライの「歓喜の世界同盟」構想の中核的組織に位置づけられたWRC国際中央事務局は、同年8月7日にベルリンで設立会議を開いた。ライの提言にもとづき、まずドレスラー＝アンドレスが総裁職務代行者として事務局の実質的な責任者となり、主事Geschäftsführerには第2回WRCのドイツ側組織委員会委員長をつとめたW・レントマイスターWalter Rentmeisterがつき、同じく同委員会に所属していたH・ヴィッテHeinz Witte、H・グラムシュHeinz Gramsch、W・キールWalter Kiehlがそれぞれ国際中央事務局の組織、会計、報道担当の責任者となった。ライ自身はDAFないしKdFと国際中央事務局の人的重複を避けたと述べたものの、こうした人事から同事務局が実質的にはDAFおよびKdFの対外プロパガンダ用外郭組織としての性格を有していたことが明らかであろう。そして同年9月29日、WRC国際中央事務局はその名称を「歓喜と労働」国際中央事務局（以下、IZB）と改めた[18]。

IZBの活動は、1936年10月の機関誌『歓喜と労働』の創刊によって本格的に幕を開けた。同誌はドイツ語、イタリア語、英語、フランス語、ポーランド語、スペイン語の6言語表記によってIZBの活動や各国における余暇の組織化の現状を伝えるカラー刷りの月刊誌であり、創刊号は第2回WRCの特集にあてられた[19]。またIZBに附設された国際余暇問題研究所は、各国の余暇運動に関する歴史研究と、統計資料や写真および図版資料の収集・整理、そしてWRCでの報告資料の準備などを通じてIZBの活動を支えた。同研究所は、担当地域ごとに区分された地域部局（北米、イタリア・イベリア、ラテン・アメリカ、バルカン・西南アジ

17）Weltbund der Freude, in: Der Angriff vom 28. Juli 1936.

18）„Freude und Arbeit“. Erste Sitzung des Internationalen Zentralbüros（Deutsche Allgemeine Zeitung vom 9. August 1936）, Aktennotiz vom 29. September 1936, in: BAB NS 5-VI/19275.

19）Bunte Rückschau in sechs Sprachen. „Freude und Arbeit“ – Eine neue Zeitschrift und ihr Zweck（Hamburger Tageblatt vom 2. Oktober 1936）, in: BAB NS 5-VI/19275.

表２　IZB 附属国際余暇問題研究所の専門部局

部局名	研究内容
1. 余暇運動の発展・形態	各国の歴史的概観／余暇をめぐる闘争と余暇利用の試み／余暇運動の精神史的・政治的分析
2. 諸国民の生活領域における余暇	人間と労働（労働憲章と経済システム、労働観、労働の実態、失業）／経済と労働（労働能率、労働時間、賃金）／労働形態（合理化、労働教育、労働者保護、職場美化）／人間と経営（指導者と従者、経営共同体）
3. 余暇と国土計画	通勤経路、余暇施設、交通問題／都市計画、保養地／ジードルング、移住、産業移転
4. 余暇と国民の健康	社会衛生、労働力の保護／住宅問題、クラインガルテン、戸建て住宅、田園都市
5. スポーツと身体鍛錬	スポーツ用地・施設の造成・建設／事業所スポーツと運動不足解消のためのリクリエーション体操／指導問題
6. リクリエーション、とくに有給休暇	有給休暇法の現状・発展／有給休暇利用の可能性の創出／旅行組織／週末および余暇利用における週末の意義
7. 余暇と文化生活	労働の風習／祝祭・民族舞踏・民謡／大衆芸術・素人芸術・素人演劇
8. 女性の余暇	主婦と母親／農村の女性／女性労働者・職員
9. 児童・青少年の余暇	家族と学校／労働、職業、職業教育／青年運動とその組織

出典）Das Institut im Internationalen Zentralbüro Freude und Arbeit. Erläuterung der 9 Sachgebeite durch Stichworte,in: BAB NS 5-VI/19277.

ア、フランス、ドイツ、スカンジナビア諸国、近東、極東）と、余暇問題の個別テーマに即した専門部局（表２参照）、そしてアーカイブによって構成された[20]。専門部局の構成は第２回 WRC の分科会テーマとほぼ一致しており、これらが余暇の組織化の主要な課題として認識されていたのである。

2.「歓喜と労働の世界同盟」構想と KdF 全国大会

第２回 WRC は、KdF の国際プレゼンスの向上のみならず、独伊枢軸の結束強化にも大きく寄与した。その象徴となったのは、1937 年６月 24 日にライと T・チャネッティ Tullio Cianetti（ファシスト全国労働組合連盟指導者）との間で締結された KdF と OND の相互交流協定である。ライ・チャネッティ協定の内容は、KdF・OND の相互信頼・連携や、独伊両レジームの社会秩序についての相互批判の排除、相互理解のための研究･視察の推進など多岐にわたるが、その主眼は、労働者旅行団の相互派遣を通じた「大衆外交」の推進に置かれた[21]。

20）Liebscher（2009）, S. 500f.
21）Das Austauschabkommen Dr. Ley=Cianetti. Sozialpolitische Maßnahmen zwischen Deutschland und Italien, in: *Freude und Arbeit,* Jg. 2, H. 9（1937）, S. 2; Liebscher（2009）, S. 560-562.

ムッソリーニのベルリン訪問にあわせて組織された1937年9月の第1回ONDドイツ旅行団を皮切りに労働者交流事業が始まり、ドイツ側からは同年10月に初めてのKdFイタリア・ツアーが企画され、また翌月からはKdFクルーズによるイタリア周遊旅行が本格的に幕を開けた。地中海に向かうKdFクルーズは1938年3月にはイタリアの支配下にあった北アフリカのトリポリに初めて寄港し、参加者たちは出迎えたムッソリーニとともに同月13日のオーストリア合邦を祝した[22)]。

その一方でDAFは、第2回WRCの閉幕時にライが提唱した「世界同盟」の実現に向け、イタリアに対しても秘密裏に準備を進めていた。「世界同盟」の名称は「歓喜の世界同盟」から「歓喜と労働の世界同盟」に改められるとともに、具体的な目的として、IZBをILOの国際労働事務局に代わる国際組織に押し上げ、余暇政策の領域におけるKdFのイニシアティブを確立することが設定された。1936年11月にマンタイが策定した計画では、1938年にローマで開催される第3回WRCにおいて「世界同盟」の発足が目論まれた。すなわち、独裁的地位を有する同盟理事長にはライを就任させ、WRC国際評議委員会を廃止するとともに同委員会メンバーを「世界同盟」の名誉幹部に推挙し、そしてIZBが「世界同盟」の執行機関の役割を果たすことが構想されたのである。この構想のなかでは、ボルシェビズムや、カトリック教会、そしてILOに大きな影響力を有していたフランスの自由主義的文化政策などが「世界同盟」の対抗勢力として想定される一方、余暇政策において国際的な影響力を有するONDの存在が、「世界同盟」実現に向けた障害として認識されたのである[23)]。

ドイツの「世界同盟」構想と並行して、1937年末に国際連盟及びILOから脱退したファシズム・イタリアにおいても、ILOに対抗し得る国際労働局の創設を目指す構想があった。チャネッティにより策定されたこの構想は、独伊枢軸を中心に、ユーゴスラヴィア、ハンガリー、日本、ポーランド、ルーマニアなどにも加

22) Liebscher (2009), S. 569-571.
23) Schreiben von Arthur Manthey vom 4. Nov. 1936: Das Internationale Beratungskomitee. Das Internationale Zentralbüro Freude und Arbeit, in: PA. RZ 408/49240; Liebscher (2009), S. 503f.

盟を呼びかけようとするものであった。これと並行してファシスト全国労働組合連盟は、選抜された労働組合幹部を各国にあるイタリア大使館・公使館に送り込み、当該国の社会立法の調査及び諸団体との関係構築に従事させる社会オブザーバー・ネットワークの構築を進めた。同ネットワークの拠点には、ロンドン、ジュネーブ、パリ、ワシントンのほか、ベオグラード、ブタペスト、アテネ、ブカレストなど南東欧諸国の首都が含まれていた。OND の先駆性と並んで、このような対外戦略の動向が、「世界同盟」の形成を通じて国際的イニシアティの掌握を図る DAF にとってイタリアが障害として認識された背景であった[24]。

表 3　第 3-5 回 KdF 全国大会プログラム（1937-1939 年）

	第 3 回大会（1937 年 6 月 10-13 日）	第 4 回大会（1938 年 6 月 9-12 日）	第 5 回大会（1939 年 7 月 20-23 日）
初日	経営事業所コンサート 外国文化の式典	賓客レセプション	賓客レセプション
2 日目	英雄顕彰式典 外国文化の式典 祝祭の夕べ 賓客レセプション 外国文化の式典	KdF スポーツ競技会 KdF 全国大会 美術展開会式 KdF 事業成果展覧会開会式 外国文化の式典	街頭コンサート KdF 全国大会 KdF 事業成果展覧会開会式 KdF スポーツ競技会 諸国民族舞踏会
3 日目	KdF 全国大会 外国文化の式典 KdF スポーツ競技会 諸国民族舞踏会	事業所コンサート・事業所美術展 スポーツ実演大会 諸国民族舞踏会	事業所コンサート 体操大会 スポーツ実演大会 諸国民族舞踏会
最終日	ドイツ民族の祝祭パレード ドイツの民俗祭礼 国防軍コンサート 花火大会	祝祭パレード「美と歓喜」 諸国民俗祭礼 バレエ実演会 花火大会／ヴィルヘルム・グストロフ号船上パーティー	祝祭パレード「美と歓喜」 諸国民俗祭礼 国防軍・ライヒ労働奉仕コンサート 花火大会

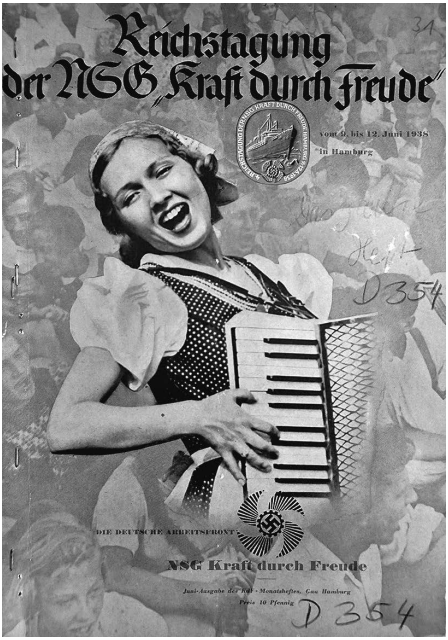
出典） Auszug aus der Programmfolge der III. Reichstagung der NS. Gemeinschaft "Kraft durch Freude" in Hamburg vom 10. bis 13. Juni 1937, in: StAH 135-1 I-IV 7505; 4. Reichstagung der N.S. Gemeinschaft "Kraft durch Freude" vom 9. bis 12 Juni 1938, in: NS 5-VI/6328; Reichstagung der NSG. "Kraft durch Freude" vom 20. bis 23. Juli 1939 in Hamburg.

こうした状況のなか、DAF の対外プレゼンスを向上させるための重要なプロパガンダ手段として位置づけられたのは、第 2 回 WRC に引き続き 1937 年以降も毎夏ハンブルクで開催された KdF 全国大会であった。ライによれば、「ハンブルク全国大会は、社会事業の領域における諸国民間の協力関係を後押しすることを目的としていた」[25] ため、毎年、余暇政策や社会政策に関する多くの専門家が

24） Liebscher（2009）, S. 602-606.
25） Hamburgs Mission als „KdF“-Stadt. „Tageblatt“-Gepräch mit Reichsorganisationsleiter Dr. Ley（Hamburger Tageblatt vom 8. Juni 1938）, in: StAH 135-1 I-IV 7506.

諸外国から賓客として招待された。その数は回を重ねるごとに減少していったものの、1937年6月に開催された第3回大会では約600人（21ヵ国）、1938年6月の第4回大会では約250人（32ヵ国）、そして1939年7月の第5回大会では約200人（21ヵ国）にのぼった[26]。表3にみられるように、大会の内容は3年間を通じてほぼ一貫しており、KdFスポーツ大会や、国内外から招かれたグループによる民族舞踏の共演、国内外参加者による祝祭パレード、ハンブルク市内の事業所従業員によるコンサートや美術展などが主たるプログラムであった。

図2　第4回KdF全国大会公式ガイドブック表紙



出典）4. Reichstagung der N.S. Gemeinschaft "Kraft durch Freude" vom 9. bis 12 Juni 1938, in: BAB NS 5-VI/6238.

KdF全国大会の果たす役割について、第4回大会の折にライは次のように述べている。

> われわれには、国外から訪れた人々に対して国民社会主義を輸出商品として推奨するつもりはない――この点は総統がしばしば言明されているとおりである――。だがわれわれのゲストは、ドイツで計画され、実践に移されたすべてのことが、もっぱらわが民族の経済的、文化的、人種的、そして国民的福利の増進に寄与していることを認識するであろう。そのうえ、当然のことながら、ハンブル

26）21 Nationen fahren übers Meer. 600 Ausländer als Gäste Dr. Leys（Hamburger Anzeiger vom 16. Juni）, in: StAH 135-1 I-IV 7505; Hamburgs Mission als „KdF"-Stadt. „Tageblatt"-Gespräch mit Reichsorganisationsleiter Dr. Ley（Hamburger Tageblatt vom 8. Juni 1938）, in: StAH 135-1 I-IV 7506; An Bord des „Robert Ley". Ausländische Ehrengäste und Volkstumsgruppen（Hamburger Fremdenblatt vom 20. Juli 1939）, in: StAH 135-1 I-IV 7514.

ク全国大会は社会的な領域における諸国民間の協働に対する力強い支援として機能することを目的としているし、またそのように機能することとなろう[27]。

この発言を裏づけるように、国内外からのゲストによる民族舞踏と祝祭パレードは、その規模の大きさゆえのみならず、毎年2,000人を上回る国外からのゲストの多さゆえに「大衆外交」の機会として積極的に喧伝された。第4回大会に日本から賓客として招待された保科胤は、大会の様子を次のように描写している。

図3　第4回KdF全国大会の祝祭パレード

出典）Festzug der Schönheit und Freude in Hamburg（Völkischer Beobachter vom 14. Juni 1938), in: BAB NS 5-VI/6238.

各国民厚生の音楽と踊りの夕が催される。各国の国歌演奏会に次いで数百の男女民衆芸術家が民俗衣裳に身を飾り、入り替り立ち替わって舞台に登り、それぞれお国自慢の芸をここぞとばかりに演ずる。〔中略〕「各国民交歓の祝典」があげられる。ハンブルクの街々は世界各国からの勤労者大衆の一大行進である。政庁前のアドルフ・ヒトラー広場に高く築き上げられた大スタンドは来賓でいっぱいだ。スタンドの前をイタリアが通る、ハンガリーが通る、フランスが通る、ギリシアが、ノルウェーが、チェコが、スペインが通る。「美と歓び」のページェントが歌と踊りを合いの手に次々に続きいつまでも果てしない[28]。

27）Hamburgs Mission als „KdF"-Stadt. „Tageblatt"-Gespräch mit Reichsorganisationsleiter Dr. Ley, in: Hamburger Tageblatt vom 8. Juni 1938（StAH 135-1 I-IV 7506).
28）保科（1942)、31-32頁。

祝祭空間としての演出に意が払われる一方、各国から多くの専門家を招待したにもかかわらず、第2回WRCと異なり、第3回以降の大会で余暇の組織化をめぐる国際討議は行われなかった。国外から専門家を招待したのはむしろ、KdFの成果を諸外国に印象づけるためであった。毎回の開会式の場で前年度のKdFの各種プログラムの成果報告が行われた上に、第4回および第5回大会では、ダムトア駅に隣接する動物園内の展示ホールにおいてKdF事業成果展覧会KdF-Leistungsschauが催された。

1939年の同展覧会を例にあげると、終業後余暇や、スポーツ、労働の美化、旅行・ハイキング・休暇、農村の美化などKdFの各種プログラムの実態が写真や、図版、模型などによって展示された。とりわけ前面に打ち出されたのは、旅行および休暇に関する取り組みである。KdF船団の「旗艦」ロベルト・ライのキャビンの実物大モデルや、リューゲン島パローラ保養施設のモデル・ルーム、そして「国民車」として謳われた「KdFヴァーゲンKdF-Wagen」の写真などがホールの中央に展示された。これらの展示は、KdF発足後の6年間という歳月が、「歓喜力行の理念とその組織的実現を通じて、ドイツ国民の生活およびその生活空間に形成的影響を与えるのに十分な期間であった」ということをアピールするものであった[29]。

また第3回および第4回大会の終了後には、国内外からの賓客・ゲストに対してKdFクルーズの体験航海に参加する機会が提供された。第3回大会の折には、ハンブルク・アメリカ郵船株式会社

図4　KdFクルーズ専属船ヴィルヘルム・グストルフ

出典）4. Reichstagung der N.S. Gemeinschaft "Kraft durch Freude" vom 9. bis 12 Juni 1938, S. 2, in: BAB NS 5-VI/6238.

29）Führer durch die Leistungsschau Kraft durch Freude. Hamburg, 21. bis 30. Juli 1939.

Hamburg-Amerikanische Packetfahrt-AG.（Hapag）からチャーターされたKdF船オシアナOceanaによってハンブルクからノルウェーのフィヨルド周遊航海が行われた。約600名の外国人乗船客のなかには、ギリシアや、ルーマニア、ポルトガルの政府要人の姿もあった[30]。

第4回大会に参加した賓客･ゲストたちは、KdFクルーズ専属船ヴィルヘルム･グストロフWilhelm Gustloffによる、リスボンおよびマディラ諸島を経由してイタリアのナポリにいたる航海に招かれた。この航海には一般のKdF会員も乗り合わせており、賓客・ゲストたちはKdFクルーズの実態をうかがい知ることができた。また体験航海に参加した賓客たちのほとんどは、第4回KdF大会のあとにローマで開催予定の第3回WRCにも招待されていた。先に引用した保科もそのなかの1人であり、航海の様子を次のように書き留めている。

> 私は今までグストロフ号ほどの豪華船を知らない。〔中略〕最上部甲板が船首から後尾に至るまでぶっ通しのスポーツと日光浴の甲板である。スポーツ用具が各種取り揃えられ、日光浴のための木製寝椅子が数百ある。〔中略〕下部遊歩甲板に取り巻かれて娯楽室、社交室、喫煙室、舞踏室、映画室、演劇室、読書室等の大ホールが次から次へと7つも続き、その下は1千人を容れるに足る2つの大食堂と船室であり、さらに図書室、水泳プールが完備し、船室は乗組員用を除き約550、いずれの船室からも直接海が見える。〔中略〕船室にはいうまでもなく一等二等の等級がなく、われわれ外国人も起床より就寝まで一介のドイツ人労働者と少しも待遇の区別をされない[31]。

第3回WRCに参加する保科ら一行はナポリに到着後、陸路でローマに向かった。同会議はONDにとって、新興のKdFに対抗してその対外プレステージを向上させるための機会であり、会期中にはOND事業展覧会が開催された。国外からの招待客には、ローマ市内のみならず、ファシズム政権によって建設された

30）21 Nationen fahren übers Meer. 600 Ausländer als Gäste Dr. Leys（Hamburger Anzeiger vom 16. Juni）, in: StAH 135-1 I-IV 7505.
31）保科（1942）、36-37頁。

新都市リットリア、ナポリの海洋祭、フィレンツェのONDコンサート、ミラノの民族舞踏ショーを視察する「イタリア周遊ツアー」も提供され、KdFとも異なる全体主義的な余暇の組織化のあり方が誇示された[32)]。

第3回WRCにおける国際討議の舞台となった分科会の構成は、表1にみられるように第2回WRCのそれとほとんど同じであったが、新たに「生活水準の向上」と、ライ・チャネッティ協定を反映させた「文化交流と相互訪問」をテーマとする分科会が立ち上げられた。第3回WRCでは、第4回開催国に日本を選出したことを除くと、一般決議事項として採択された事項はなく、各分科会の個別決議がなされただけであった。「文化交流と相互訪問」に関する第11分科会では、バルト海沿岸諸国や、南米諸国、そしてバルカン諸国など同種のものとして統合され得る隣接諸国が参画する地域レベルでのリクリエーション会議や博覧会の開催を勧奨することが決議された[33)]。第3回WRCに先立ち、すでに最初の「歓喜と労働」移動博覧会がアテネで開催されていたので、この決議は移動博覧会の実施を事後的に推奨するものであったといえよう。

他方、第3回WRCでは、DAFの企図した「歓喜と労働の世界同盟」の結成が見送られた。その具体的な経緯は詳らかではないが、この結果、余暇の組織化をめぐる国際的イニシアティブの掌握を目指すDAFは、引き続きKdFモデルの対外プロパガンダの積極的展開を通じて支持国の獲得につとめ、あらためて「世界同盟」結成の機会をうかがうことを余儀なくされた。そして、そのための手段として大きな期待をかけられたのが、すでに始動していた南東欧における一連の「歓喜と労働」移動博覧会だったのである。

3.「歓喜と労働」移動博覧会の開催経緯

南東欧諸国における「歓喜と労働」移動博覧会の開催は、1937年10月23日にブルガリアの首都ソフィアで開かれたIZB主催の多国間協議で決定された。これは、ライ・チャネッティ協定にもとづく独伊間の労働者旅行団の相互派遣が本格的に開始されたのとほぼ同じタイミングのことである。この協議には、IZB関

32）保科（1942）、76-93頁。
33）Internationales Zentralbüro „Freude und Arbeit“（1938）, S. 15.

係者のほか、ブルガリア、ギリシア、ユーゴスラヴィア、ルーマニアの代表者が出席し、「労働と歓喜」の調和を標榜した第2回 WRC 諸分科会の決議によって設定された目的を、ドイツにおける KdF の成果に即して示すことに移動博覧会開催の主眼を置くことが決定された。

移動博覧会の開催地として予定されたのはアテネ、ベオグラード、ブタペスト、ブカレスト、ソフィア、ウィーンの6都市――前述のように、実際に開催されたのは、アテネ、ソフィア、ブカレストの3都市――であった。各都市における準備と各国における余暇の組織化についての展示はそれぞれの開催国の政府関係者や余暇組織の代表者によって構成される各国実行委員会が進める一方、各回の共通展示および KdF に関する展示については IZB が準備を進めることとされた。

またこの協議では、労働者旅行団の相互派遣を実現させたライ・チャネッティ協定を、「労働と歓喜」の枠組みのなかで実践に移された取り組みのなかでもとくに「諸国民間の協働の模範」と位置づけ、同様の取り組みを南東欧諸国間でも実施することの必要性が共有された。そして、労働者旅行団の相互派遣をする上では、アドリア海や、エーゲ海、黒海、そしてドナウ川が、南東欧地域の特性をよく反映した旅の目的地として推奨された[34]。

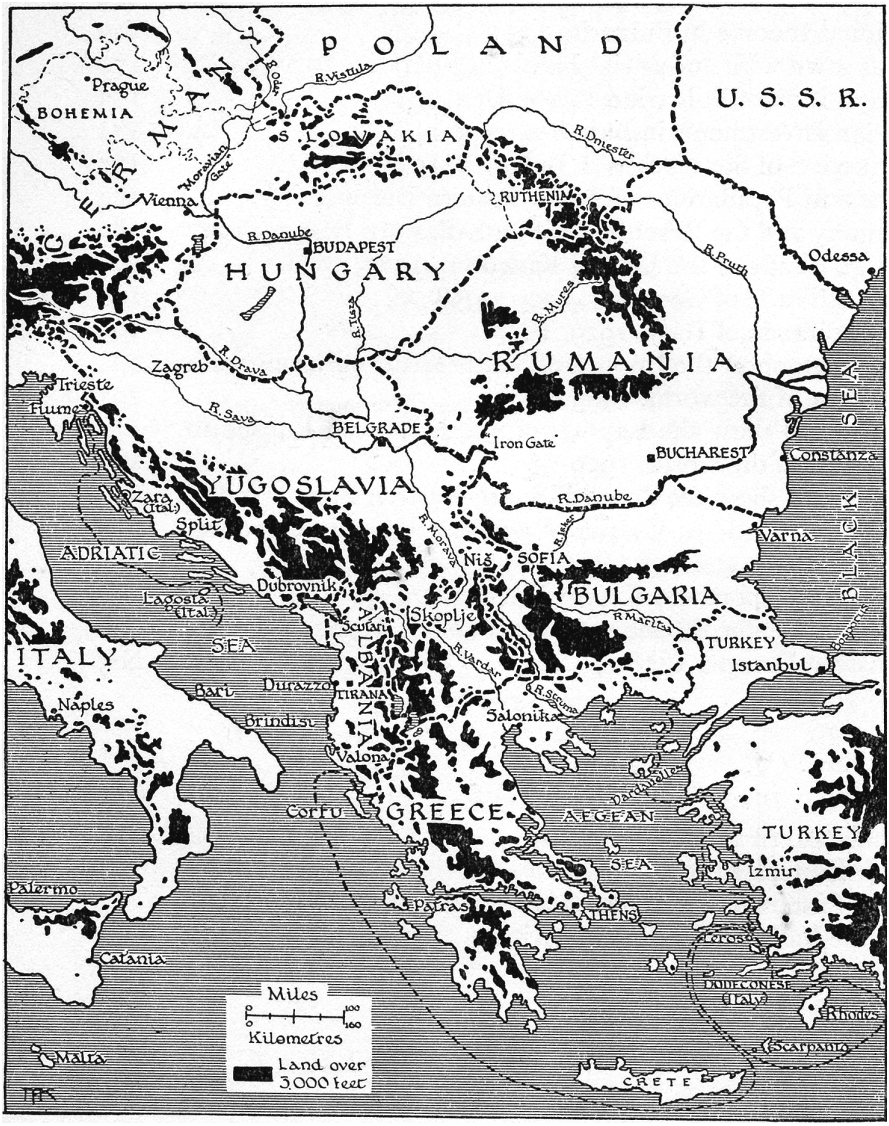
移動博覧会の開催国となった3ヵ国は、この当時いずれも、いわゆる「国王独裁体制」の下にあった。ブルガリアで1934年に成立した国王ボリス3世支配下の「五月十九日体制」や、1938年に国王独裁を認める新憲法を制定したカロル2世支配下のルーマニアはその典型といえる。ギリシアで1936年に成立した「八月四日体制」は首相I・メタクサス Ioannis Metaxas による全体主義的な独裁政権であり、ナチス・ドイツに倣い「第三ギリシア文明」を標榜した。メタクサス・レジームのあり方は、ブルガリアやルーマニアのそれとは異なるものの、その権力基盤が国王にあったため、「国王独裁体制」の一種としてみなされ得る[35]。

---

34) 以上のソフィアで開催された協議の内容については、Ergebnisse der Besprechung am 23. Oktober 1937 in Sofia. Betr.: Wanderausstellung „Arbeit und Freude“ in den Hauptstädten der südosteuropäischen Länder in der Zeit vom Januar bis Mai 1938, Ideenskizze zur einer Wanderausstellung „Arbeit und Freude“ (20. Oktober 1937), in: PA RZ 408/49233 を参照。

35) The Royal Institute of International Affairs (1939), pp. 71-75, 93-95, 104-106; 木村 (1998)、279-284 頁、クロッグ (2004)、122-123 頁、村田 (2005)、330-334 頁。

図5　1930年代の南東欧



出典）The Royal Institute of International Affairs (1939), p. xvi.

「国王独裁体制」下にあったこれらの国々の国際関係上の立ち位置について、ヴェルサイユ体制を基準としてみると、ルーマニアはもともと同体制の現状維持を支持する体制維持派に区分され、同じく体制維持派に属するユーゴスラヴィアおよびチェコスロバキアと共に相互安全保障のための小協商体制を 1920/21 年に結成した。小協商諸国は戦勝国の英仏両国と緊密な関係にあり、とくにフランスはヴェルサイユ体制維持のために小協商諸国と同盟を結んだ。世界恐慌の勃発に伴う経済危機の局面が訪れると、1934 年にルーマニアと、ユーゴスラヴィア、トルコ、そしてギリシアとの間でバルカン協商が結ばれ、関係強化が図られた。

他方、第 1 次大戦の敗戦国ブルガリアは、ハンガリーやオーストリアと並び、ウィーン体制に不満を有する修正主義派に位置づけられる。ドイツでナチ政権が成立すると、その影響を受けたブルガリアも、ナチ・レジームの唱えるヴェルサイユ体制の打破に同調する姿勢を示した。バルカン協商はこうしたブルガリアの動きを抑制する存在と目されたが、国際関係の変化から独伊枢軸に接近したユーゴスラヴィアが 1937 年 1 月にブルガリアと恒久友好条約を締結したのを契機に、バルカン協商は弱体化を余儀なくされた。これに伴いルーマニアはドイツへの接近を試み、英仏およびドイツとの等距離外交路線をとることとなる。同じくバルカン協商に属していたメタクサス政権下のギリシアは、独伊の全体主義レジームと親和性が高かったものの、外交面では親英路線を堅持した[36)]。

複雑かつ流動的な様相を呈した国際関係から経済面に目を向けると、1934 年のシャハトの「新計画」を契機として、南東欧諸国は一様にナチス・ドイツへの依存を深めた。わけても依存度が高かったのはブルガリアである。ブルガリアは南東欧諸国のなかでもとくに工業化の進展が遅く、650 万を数えた人口の約 8 割が農業に従事する農業国であった。首都ソフィアで「歓喜と労働」移動博覧会が開催された 1938 年のブルガリアの輸出総額の 58.8 ％と、輸入総額の 51.9 ％をドイツが占めた。そして輸出の中核をなした農産物のうち、ドイツ向けの輸出が占めた比率は、豚肉 100 ％、ぶどう 93.5 ％、鶏卵 78.0 ％、タバコ 57.6 ％にのぼっ

36）以上の南東欧諸国の国際関係の変遷については、次の諸文献を参照：The Royal Institute of International Affairs (1939), pp. 14-16, 19, 40-41; 六鹿（1998）、285-295 頁、クロッグ（2004）、124-125 頁。

た[37)]。

人口約1960万人のルーマニアの輸出入総額に占めるドイツの比率は、「新計画」が発動された1934年の時点で16.7％と15.5％であったが、1937年までにそれぞれ19.8％と28.6％にまで増大した。ルーマニアの主力産業は小麦とトウモロコシを中心とする農業であったが、南東欧諸国のなかではハンガリーと並んで比較的順調な工業化の進展がみられた。なかでも特筆すべきは石油産業であり、採掘の主導権は外資に握られていたものの、1937/38年には輸出総額の約4割を石油が占めた。ドイツはルーマニアにとって最大の石油輸出先であったが、1938年の輸出量全体に占める比率は15.4％に過ぎず、第2位・第3位の輸出先である伊英両国の比率と大きな差はなかった。ドイツは、ルーマニアからの石油供給を安定化させるため、ブカレストで「歓喜と労働」移動博覧会が開催される直前の1939年3月にルーマニアとの間で通商協定を結び、石油開発のための両国合弁会社設立の合意を取りつけた[38)]。

山地の多いギリシアは南東欧諸国のなかでもとくに耕地面積が狭く、また地下資源にも恵まれていなかったが、約690万人の国民の生活水準は当該地域のなかでも比較的高かった。その経済力の源泉は、タバコおよびぶどう栽培を中心とする農業と、不定期航路を基盤とする海運業にあった。伝統的な親英路線にもかかわらず、「新計画」の発動によってギリシアの輸出入総額に占めるドイツの比率は漸次増大し、1934年から1938年までにそれぞれ22.5％から38.6％と、14.7％から29.0％に達した。なかでも主力輸出商品のタバコのドイツへの依存度が高く、1937年の輸出額の43％がドイツ向けであった[39)]。

こうしてドイツへの経済的依存を強めつつあった南東欧地域における余暇のあり方について、IZBを通じて情報を収集していたDAFは次のように捉えていた。すなわち、「スラブ諸民族」の間では依然として「大家族」制が優勢であり、西欧の自由主義社会と比較して「濃密な人間関係と強い共同体精神」が共有されている。

37）Arbeitswissenschaftliches Institut der Deutschen Arbeitsfront（1940）, S. 116-118; The Royal Institute of International Affairs（1939）, pp. 99-106.
38）Arbeitswissenschaftliches Institut der Deutschen Arbeitsfront（1940）, S. 107-113, 139; The Royal Institute of International Affairs（1939）, pp. 125-137.
39）The Royal Institute of International Affairs（1939）, pp. 156-165.

これら「素朴な諸民族」の間では、教会が社会生活の基軸をなし、余暇利用においても教会が基盤となっている。聖職者が余暇利用の指導者役をつとめ、また伝道精神が思想的基調をなしているため、「無為があらゆる悪徳の起点である」と考えられ、余暇は「罪過の温床」とみなされ、日曜日や祝日は、教会や宗教関係の協会において聖職者の監督の下で余暇を過ごすことが求められる。またドイツやイタリアと比べると、劇場や、映画館、図書館、美術館などの文化施設は大きな意義を有しておらず、スポーツの果たす役割も大きくない。他方で、村の居酒屋における踊りや、アルコールもまた余暇生活のなかで一定の役割を果たしている[40]。

DAF の見解によれば、各地域の国民ないし民族は次の３類型に区分される。

(1) 領土の大半が農地で、労働と消費が自然な一体性を形成している国民･民族。
(2) 資本主義と工業化の発展により土地･労働･消費の一体性が保たれているが、いまだ新たなゲマインシャフトを実現するにいたっていない国民・民族。
(3) 資本主義と工業化の発展による文化の破壊を乗り越え、新たな文化的ゲマインシャフトを実現している国民・民族。

自国を類型 (3) に位置づけるこの分類において、農業が経済の基盤をなし、教会を中心とする伝統的な余暇生活が営まれていた南東欧諸国は基本的には類型(1)に分類される。そして同類型においては､伝来の余暇のあり方を破壊する可能性があるため新たな余暇利用法を導入する必要はなく、伝来の余暇文化を促進する道具（ラジオ・映画・交通手段など）の導入にとどめるべきであるとされた[41]。

だが､「歓喜と労働」移動博覧会を開催したギリシア、ブルガリア、ルーマニアにおいては、博覧会の開催が決定された頃より、政府主導によって余暇の組織化が進められた。最も早く着手したのはギリシアのメタクサス政権であり、1937年６月に「労働者の経済的・精神的・道徳的発展のための全般的支援」を目的とする「労働者ハイム Εργατική Εστία」が労働省の下に発足した。その活動内容は、ハイキング旅行や講演会などの企画にはじまり、図書館の建設、精神修養および肉体鍛錬に必要な施設の整備、女性および青年向けの保養施設の建設、労働者向

40) Zur Frage der Freizeit und Freizeitgestaltung in den europäischen Ländern ausser Deutschland und Italien, in: BAB NS 5-VI/39368.
41) Freizeitgestaltung in der Welt (Mai 1938), in: BAB NS 5-VI/39368.

け住宅の整備、「労働者福利週間」や「労働祝日」の導入など多岐にわたった[42)]。

次いでブルガリアでは 1937 年に、文化相を委員長とし、手工業者連合、労働組合連合、農民連合、商人連合、教員連合、自治体官吏連合、鉄道職員連合、スポーツ振興協会、ツーリスト協会などを傘下に収める国民委員会「労働と歓喜 труд и радост」が発足した。同委員会は、「歓喜と労働」移動博覧会の準備を通してブルガリアにおける余暇運動の普及につとめるとともに、ラザロス祭 Lazarusfest（1938 年 4 月）や収穫感謝祭（1938 年 9 月）の企画によって伝統的な習俗の維持・再興をはかり、同年 5 月 1 日「労働の日」を「労働と歓喜」のモットーのもとで祝ったほか、ブルガリアでは初めての試みとなる勤労者のための小規模なハイキング旅行を全国的に展開させた[43)]。

そしてルーマニアでは、移動博覧会開催の決定を契機に、1938 年 4 月 1 日労働省によって余暇の組織化のために 2300 万レウ Lei の基金が設立され、同年 8 月には労相 M・ラレア Mihai Ralea が独・伊視察旅行の直後に労働省内に余暇委員会「労働と明朗 Muncă și Voe bună」を設立した。同委員会は同月、1000 人規模の労働者ハイキング旅行によって余暇の組織化に本格的に乗り出し、また同年中に労働者の黒海へのクルーズ旅行用に 1 隻の蒸気船を入手した。文化面においては、労働者向けの「労働と明朗」劇場が設立されるとともに、1938 年 11 月には労働省によってブカレスト労働者大学が設立された[44)]。こうして発足した余暇組織が 3 ヵ国における移動博覧会の受け皿となったのである。

---

42) Zum Schreiben des IZB vom 30. Januar 1939（Betr. Länderinformationen aus dem Quellen Material des IZB: Südosteuropäische Staaten）, in: BAB NS 5-VI/39368.

43) Bulgarien vom 25. November 1937, in: BAB NS 5-VI/29845; Zum Schreiben des IZB vom 30. Januar 1939（Betr. Länderinformationen aus dem Quellen Material des IZB: Südosteuropäische Staaten）, in: BAB NS 5-VI/39368.

44) Zum Schreiben des IZB vom 30. Januar 1939（Betr. Länderinformationen aus dem Quellen Material des IZB: Südosteuropäische Staaten）, in: BAB NS 5-VI/39368. 2300 万レウにのぼる基金の使途は、次のとおりであった：「労働と明朗」劇場 600 万レウ、スポーツ・旅行施設の整備 400 万レウ、ラジオ放送網の整備および文化的映画の製作 400 万レウ、国内 20 ヵ所に分館を有する図書館の整備 400 万レウ、音楽・オペラ振興 300 万レウ、予備費 200 万レウ。Vgl. R-1201, Freizeitgestaltung der rumänischen Arbeiterschaft（Südosteuropäisches Wirtschaftsarchiv vom 10. August 1938）, in: BAB NS 5-VI/30301.

4. アテネからソフィアそしてブカレストへ

1938年5月1日、「歓喜と労働」移動博覧会はアテネにおいて幕を開けた。会場となった市中心部に位置する博覧会ホールのザッピオンZappionにはIZB加盟国61ヵ国の国旗が掲げられ、その周囲にはギリシアの複数の青少年組織や、労働奉仕団、労働組合が集った。開会式には、ライをはじめとするIZB関係者や、メタクサスらギリシア政府の要人が臨席した。開会を宣したのは、「歓喜と労働」博覧会アテネ大会実行委員会委員長をつとめた労相N・フォカスNikolas Phokasである。フォカスは、ギリシアでも「八月四日体制の成立によって初めて余暇の組織化に向けた空前の取り組みが可能に」なったと述べ、博覧会の開催が自身の率いる「労働者ハイム」の活動のさらなる発展の契機となることを通じて、メタクサス政権による社会統合に資することに期待を寄せた[45]。

図6　IZB機関誌『歓喜と労働』（第1回移動博覧会特集号）表紙

出典）Freude und Arbeit, Jg. 3 H. 5 (1938).

次いで同年10月2日ソフィアの新芸術大学ホールにおいて、2度目の移動博覧会の開会式が挙行された。臨席した国王ボリス3世をはじめとするブルガリアの政府要人を前に開式の辞を述べたライによれば、第1に「民族発展の基礎」は「勤労・勤勉・規律」にあること、また「業績だけが社会のなかにおける立ち位置を決定」するとともに、「社会的栄誉」を与えるので各人の勤労に注目する必要があること、そして「労働とは厭うべきもの」ではなく、「この世のあらゆる美しいもの」の基礎であり、「創造者に誇りを与える」ものであることなどが移動博覧会の基本認識としてあげられる。その上でライは、博覧会で示す「知識・勤労・意志」を「ボルシェビズム打倒」に集約させることの

45）Neue Athener Zeitung vom 7. Mai 1938, in: BAB NS 5-VI/19276.

重要性を訴え、DAF ひいてはナチ・レジームの世界観を改めて強調した[46]。

第1回と第2回移動博覧会では、ザッピオンや新芸術大学ホールのような1つの広大な建物の内部を複数のスペースに分けて展示品を陳列する同一のスタイルがとられた上に、展示内容についても類似性がみられた。ここでは、公式ガイドブックが残されている第2回移動博覧会に即して、展示内容をみていこう[47]。

図7　第2回「歓喜と労働」移動博覧会公式ガイドブック表紙

出典）Führer durch die Wanderausstellung Freude und Arbeit, in: BAB NS 5-VI/19276.

表4　第2回「歓喜と労働」移動博覧会（1938 年 10/11 月）の展示構成

部屋番号	展示内容
1	「歓喜と労働」国際中央事務局
2	ブルガリアにおける「歓喜と労働」
3	「歓喜と労働」の理念と運動
4	南東欧諸国における「歓喜と労働」の基盤
5	民衆から発展した文化
6	各時代の絵画に描かれた余暇／偉人たちの趣味
7	成人教育
8	労働
9	職場美化
10	農村美化
11	労働・余暇・国土利用計画
12	身体を鍛錬する民族
13	終業後余暇
14	女性の労働と余暇
15	KdF 国外ツアー
16	KdF 国内ツアー
17	海上における職場美化
18	IZB 機関紙『歓喜と労働』
中庭	青少年の労働と余暇

出典）Führer durch die Wanderausstellung „Freude und Arbeit“ im Gebäude der neuen Kunstakademie Sofia 9. Oktober bis 1. November 1938,in: BAB NS 5-VI/19276.

46）Sofia hört Dr. Ley. Eien Rede, von der Bulgarien sprach, in: *Freude und Arbeit*, Jg. 3, H. 11（Nov. 1938）.

47）以下の第2回移動博覧会の展示内容に関する叙述は次の史料にもとづく：Führer durch die Wanderausstellung „Freude und Arbeit“ im Gebäude der neuen Kunstakademie Sofia 9. Oktober bis 1. November 1938, in: BAB NS 5-VI/19276. 第1回移動博覧会の展示については次の史料を参照：Eine deutsche Ausstellung wandert nach Griechenland（Berliner Börsen Zeitung vom 6. Mai 1938）, in: BAB NS 5-VI/19276; Eröffnungsfeier（Neue Athener Zeitung vom 7. Mai 1938）, in: BAB NS 5-VI/19276.

表4にも示したように、建物の正面玄関を入ってすぐにある第1室では、第2回WRCにまでさかのぼって「歓喜と労働」運動の理念に関する展示がなされ、IZB加盟国の社会政策や余暇の組織化の専門家たちの同理念に関する格言が室内を埋め尽くした。なかでも、「頭脳労働者と肉体労働者、すなわち勤労に従事するすべての人々に対して、さらなる健康と、幸福、そして満足感をもたらすとともに、そのことを通じて、勤労者が奴隷としてではなく、自発的な喜びの意志によって職務をまっとうできるようにしなければならない」という国際評議委員会委員長カービーの言葉こそが「歓喜と労働」理念に関する至言と目され、スポットライトを当てられた。この第1室の他に、IZB専門部局の活動についての説明がなされた第3室、そしてIZBの機関誌『歓喜と労働』のサンプルとそれにまつわる展示がなされた第18室がIZB関係の展示室であった。

第2室と第4室はそれぞれブルガリアと南東欧諸国における余暇のあり方に関する展示にあてられた。第2室の展示はブルガリアの歴史と、第2回WRC以降の余暇の組織化の成果に大別できる。前者については、約500年にわたるオスマン帝国による支配にもかかわらず、「民族舞踊や、明るくかつメランコリックな民謡、幻想的な刺繍や織物、そして民族衣装のなかに独自の民族性が保持されてきた」[48]ことと、第1次大戦の敗戦後にヨーロッパで初めて導入された労働奉仕に焦点が当てられた。後者については、余暇組織「労働と歓喜」が、階級区分の打破を標榜することによりブルガリア国民の間で急速に人気を博するに至った経緯が紹介された。第4室では、各国の祝祭風景を再現したジオラマを中心に、ハンガリー、ギリシア、ユーゴスラヴィア、ルーマニア、そしてブルガリアの「民族性」を反映した伝統的風俗や慣習に関する展示がなされた。

残りのスペースはすべてドイツ関係の展示室であり、「民衆から発展した文化」をテーマとする第5室では、余暇の手すさびで製作された木版画や、織物、刺繍などが「何かを創造したいという民衆の自発的な気持ち」の実例として展示されるとともに、それが「歓喜と労働」の意味を正確に把握するための前提とされた。

48) Führer durch die Wanderausstellung „Freude und Arbeit“ im Gebäude der neuen Kunstakademie Sofia 9. Oktober bis 1. November 1938, S. 15, in: BAB NS 5-VI/19276.

隣接する第 6 室では 15 世紀から 20 世紀にかけてドイツで余暇をテーマとして描かれた絵画が展示された。

そしてこれ以外はすべて、DAF と KdF のプログラムに関する展示によって占められた。その内容は順に、「成人教育」、「労働の成果」、「職場美化」、「農村美化」、「労働・余暇・国土利用計画」、「身体鍛錬」、「終業後の余暇」、「女性の労働と余暇」、「KdF 国外ツアー」、「KdF 国内ツアー」、「海上における職場美化」、「青少年の労働と余暇」であった。

なかでも展示規模が大きかったのは KdF による国内外ツアーであり、バルト海のリューゲン島に建設された保養施設のモデル・ルームや、KdF クルーズ専属船ヴィルヘルム・グストロフの模型、自家用車旅行の将来的な可能性を示したアウトバーンのジオラマなどが展示された。これらの展示を通じて、国内外ツアーの前提となる休暇とは、「勤労者が日常の単調さによって消耗した力を回復させるとともに、生に対する喜びを新たにするための源泉」であり、KdF の企画する国外ツアーは「国民間の正真正銘の友好関係を樹立するための重要な手段」であることが強調された[49]。

このように、移動博覧会のスペースの大部分は DAF および KdF の展示によって占められた。ギリシア労相フォカスが、「ドイツが形成した組織化の試み」のみならず、「余暇の組織化の領域においてギリシアが成し遂げた成果」[50] を示すものであることを強調したものの、アテネでも「労働者ハイム」を中心とするギリシアにおける余暇の組織化に関する展示に割り当てられたスペースは 1 室に過ぎなかった。第 1 回移動博覧会の開幕を伝えたあるドイツ系の新聞が、「ドイツの博覧会がギリシアを訪れた」[51] という見出しをつけたように、移動博覧会は KdF 余暇モデルの「輸出」企画ともいうべき性格を有していたのである。

アテネでもソフィアでもこの「輸出」に対する反響は大きく、例えばアテネの地元紙は次のように報じている。

---

49) Führer durch die Wanderausstellung „Freude und Arbeit“ im Gebäude der neuen Kunstakademie Sofia 9. Oktober bis 1. November 1938, S. 42f., in: BAB NS 5-VI/19276.
50) Eröffnungsfeier (Neue Athener Zeitung vom 7. Mai 1938), in: BAB NS 5-VI/19276.
51) Eine deutsche Ausstellung wandert nach Griechenland (Berliner Börsen Zeitung vom 6. Mai 1938), in: BAB NS 5-VI/19276.

古代ギリシア人が教示した美なるものと有用なるものをすべて活用し、そして完成に導いたドイツ人たちは、労働の喜びに取り組み、この問題を一つの合言葉とした。過去4年間、彼らはもてるすべての組織力と、利用可能な驚くべき資金を投じ、壮大な事業を成し遂げたのである[52]。

アテネでは当初、移動博覧会の会期は2週間に設定され、終了直後にIZBおよびKdFに関する展示品を次の開催地となるソフィアに輸送する予定であった。だが、博覧会の反響の大きさを重視したギリシア政府の要望により会期は2週間延長された。そして最終的には、国王ボリス3世の即位20周年記念にあわせるため、ブルガリアでの開催は10月2日にまで繰り延べられることとなったのである[53]。

移動博覧会はKdF余暇モデルの輸出の役割を果たしただけでなく、南東欧がKdFクルーズの目的地に組み入れられる契機ともなった。アテネでの移動博覧会の直後に開催された第4回KdF全国大会において、「友好国」へのKdFクルーズ航路の拡張が予告され、1940年に開催予定の東京オリンピック観戦を目的とする世界周遊クルーズの実現が最終的な目標に設定された。そして、その前段階として、ギリシアとユーゴスラヴィアへのKdFクルーズの就航が計画されたのである[54]。

この予告どおり、ソフィアでの移動博覧会が閉幕した直後の1938年11月、Hapagからチャーターされたオシアナが KdF船としては初めてギリシアを訪れた。オシアナは、ヴェストファーレン北大管区およびヴェーザー＝エムス大管区のKdF休暇者計662人を乗せ、11月8日にヴェネツィアを出航し、11日にイテア、そして翌12日にピレウスに寄港した。KdF休暇者たちは、イテア上陸時にはデルフォイ神殿を見学し、ピレウスからはアテネ観光に赴いた。ピレウスに

52) Ein Feldzug für die Arbeitenden: Ein Interview mit Dr. Ley（Kathimerini vom 5. Mai 1938）, in: PA RZ408/49234.
53) Die Ausstellung „Arbeit und Freude“（Sora vom 7. Mai 1938）, Die Ausstellung „Arbeit und Freude“ wird verlegt（Sora vom 27. Juli 1938）, in: BAB NS 5-VI/19276.
54) Die KdF-Reisepläne für den Balkan und Fernost（Hamburger Tageblatt vom 10. Juni 1938）, in: StAH 135-1I-IV 7506.

到着したのは12日午前4時であり、その日の午前中には、在ギリシアのドイツ公使およびナチ党代表、ギリシア政府およびアテネ市の代表がオシアナの船上レセプションに招かれ、午後にはその返礼として、オシアナの幹部、乗船していたナチ党代表者およびKdFツアー指導者がアテネでのレセプションに招待された。オシアナは翌13日午前1時にはピレウスを抜錨し、ユーゴスラビアのスプリトに寄港しつつ、11月16日にトリエステに入港した。ここで乗船客の入れ替えが行われ、新たにポンメルン大管区およびベルリン大管区のKdF休暇者686人が乗船した。彼らを乗せたオシアナは11月20日にトリエステを出港し、第2次KdFギリシア・クルーズとして、前回と同様のルートで11月24日と翌25日にイテアとピレウスに寄港し、スプリト経由で11月28日にヴェネツィアに帰港した[55]。

その後もKdFのイタリア周遊クルーズの任に就きつつ地中海にとどまっていたオシアナは、1939年2月に再びヴェネツィアから第3次・第4次KdFギリシア・ツアーに赴いた。ルートは前年とほぼ同様で、第3次ツアーでは2月24日と26日に、第4次ツアーでは3月8日と9日にそれぞれイテアとピレウスに寄港した。第3次ツアーにはハンブルク大管区およびデュッセルドルフ大管区から678人が、第4次ツアーには東プロイセン＝ダンツィヒ大管区およびヘッセン＝ナッサウ大管区から695人が参加した。また第3次のピレウス寄港時にはアテネのヒトラー・ユーゲント約60名がオシアナに招待され、第4次の際には3月9日に労相主催の昼食会に、オシアナ号の幹部、乗船していたナチ党代表者およびKdFツアー指導者が招待され、その返礼としてアテネの複数の余暇組織の代表者がオシアナの船上夕食会に招かれた[56]。

アテネのドイツ公使館の報告によれば、オシアナの寄港は、「ドイツ人にとって憧憬の地であったギリシアが到達可能な旅先」になったことを意味し、そのことは観光業界をはじめとするギリシア人関係者から大いに歓迎された。またアテ

55）Reisebericht des Kapitäns vom Schiff „Oceana“ 80/103-104. Reise vom 1. Dezember 1938, in: StAH 621-1/95 4649, Teil 2.

56）Reisebericht des Kapitäns vom Schiff „Oceana“ 80/112 Reise vom 1. März 1939, in: StAH 621-1/95 4649, Teil 2.

ネへのKdFクルーズ客の訪問は、「ドイツが労働者に与えられるもの」を明瞭に示すことを通じて、ギリシアにおける「有益な文化プロパガンダ」として機能した[57]。

3回目のそして最後の移動博覧会がブカレストで開幕したのは1939年6月20日のことである。開会の辞のなかでルーマニア労相M・ラレアMihai Raleaは、同博覧会を約1年前に発足した「労働と明朗」による「労働者の精神的・文化的水準の向上」のための試みの「最初の決算を示す機会」として捉えた。ラレアによれば、「労働と明朗」の活動を通じて、KdFやONDの経験を積んだ独伊と同様に、ルーマニアも労働者の意識向上の時代に追いつくことができるようになり、労働者層を他の社会層に融和させることが可能となった。そして、こうした成果のすべては、「労働者が胃袋だけでなく精神も有する存在であることを広く知らしめることとなった」国王カロル2世の指導に帰すべきであるというのがラレアの演説の骨子であった[58]。

図8　第3回「歓喜と労働」移動博覧会の様子

出典）Freude und Arbeit, Jg.4, H.7（1939）, S 8f.

ブカレストでの第3回移動博覧会の最大の特徴は、開催国ルーマニアとドイツの他に、南東欧諸国を含む10ヵ国が展示に加わったことである。移動博覧会場には、ドイツとルーマニアのパビリオンと並んで、イタリア、ギリシア、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、フランス、そしてIZBのパ

57）Schreiben der Deutschen Gesandtschaft in Athen an das Auswärtige Amt vom 15. Nov. 1938, Betr. Der Besuch eines KdF-Dampfers in Griechenland, in: PA RZ 408/49245.

58）Eröffnung der internationalen Ausstellung Freude und Arbeit in Bukarest（Universul vom 22. Juni 1939）, in: BAB NS 5-VI/30301.

ビリオンが建設され、IZB パビリオンのなかには、ポルトガル、スペイン、ノルウェー、ハンガリー、そして日本のためのスペースが設けられた。アテネとソフィアでの移動博覧会がもっぱらドイツと開催国の 2 国間イベントの性格を有していたのに対して、ブカレストでのそれは、さながら「社会事業の領域における万国博覧会」[59] の様相を呈したのである。

数あるパビリオンのなかでもとくに人々の注目を集めたのは、余暇の組織化の領域において「先頭を行進しているドイツとイタリア」[60] のそれであった。ドイツ・パビリオン内は 3 つのスペースに区切られ、それぞれドイツの政治・経済の現状、DAF の活動、そして KdF の活動に充てられた。この展示を取材したブカレストの地元紙は、「生とは、労働と闘争を意味」し、家族共同体、ヒトラー・ユーゲント、労働奉仕・兵役、そしてナチ党およびその組織を通じて、「ドイツ人は生に関するこの原理を早くから認識するよう教育された結果、活動的な形態における自らの運命を意のままにすることができるようになった」と紹介した。KdF の余暇活動そのものよりも、共同体的な教育組織としての機能に着目した点は、ルーマニア・パビリオンが、国王カロル 2 世が 1935 年に政敵であった鉄衛団に対抗するため、ヒトラー・ユーゲントおよびファシズム・イタリアのバリッラに倣い結成した青少年組織「祖国防衛隊 Straja Țării」と、その傘下に置かれた「キリスト教青年協会 Asociaţia Tineretului Român」に焦点をあてたことと軌を一にしている [61]。

他方、ドイツ側が積極的に喧伝したのは、これまで移動博覧会にオブザーバーとしてのみ参加していたフランスが正式に参加国に名をつらね、パビリオンを出展するとともに、教育省局長 J・リュック Jean Luc を団長とする代表団をブカレストに派遣したことである [62]。フランスはイギリスと共に第 1 次大戦前よりバル

59）Deutsche Arbeitskorrespondenz vom 22. Juni 1939, in: BAB NS 5-VI/19277.
60）Deutsche Arbeitskorrespondenz vom 22. Juni 1939, in: BAB NS 5-VI/19277.
61）Eröffnung der internationalen Ausstellung „Freude und Arbeit“ in Bukarest（Übersetzung des Artikels in Universul vom 22. Juni 1939）, in: BAB NS 5-VI/30301; 祖国防衛隊とキリスト教青年協会については、藤嶋（2012）、206-209 頁を参照。
62）Auch Frankreich war in Bukarest vertreten. Jean Luc sprach vor dem Internationalen Zentralbüro „Freude und Arbeit“（Der Angriff vom 25. Juni 1939）, in: BAB NS 5-VI/19277.

カン半島に大きな影響を及ぼしてきただけでなく、1936年に成立したフランス人民戦線政府は、DAFと競合するILOの強力な支持母体であった。そのフランスがILOの会期中にIZBの移動博覧会に参加したことを、ライは両組織の明暗を分ける「運命の兆し」として評価したのである[63)]。

ブカレストでの移動博覧会の「成功」を宣言したライは、次の移動博覧会はベオグラードで、さらにブタペストで開催予定である旨を予告し、両都市でも「IZB『歓喜と労働』は引き続き凱旋行進を行う」ことになろうと締めくくった[64)]。そして、IZBが策定したロードマップでは、南東欧諸国に引き続き、北欧諸国、さらにはオランダとベルギーでも移動博覧会を開催することが計画された[65)]。これらの国々では、南東欧諸国と異なり、KdFモデルと競合する余暇モデルがすでに展開しており、ブカレストでの移動博覧会へのフランスの参加がKdFモデルの輸出志向をさらに強めたことを示唆している。

移動博覧会の将来的な開催予定地として列挙された国々のなかでも、ベルギーはフランスと共にILO陣営の中核国であり、DAFにとってはまさに競合勢力の本丸に等しい存在であった。他方、北欧諸国での移動博覧会の開催計画は、1940年の第4回WRC開催地にスウェーデンの首都ストックホルムが選ばれたことに起因すると考えられる。先述のように、もともとローマで開催された第3回WRCにおいて第4回WRCは日本で開催することが決定されたが、その直後に日中戦争の激化を理由に日本がオリンピック開催の返上と共にWRCの開催を辞退したため、開催国を改めて選ぶ必要が生じ、ブカレストでの移動博覧会に先立ち1939年2月にロンドンで開催されたWRC国際評議委員会においてストックホルムが代替開催地として選ばれたのである。

この間、「建国800周年」記念にあわせてポルトガルが第4回WRCの招致に名

63）„Freude und Arbeit“ in Bukarest von Dr. Robert Ley（Der Angriff vom 28. Juni 1939）, BAB NS 5-VI 19277.
64）„Freude und Arbeit“ in Bukarest von Dr. Robert Ley（Der Angriff vom 28. Juni 1939）, BAB NS 5-VI 19277.
65）Der Ausbau des Zentralbüros für „Freude und Arbeit“. Dr. Ley bei König Carol - Empfang der Deutschen Kolonie（Völkischer Beobachter vom 23. Juni 1939）, in: BAB NS 5-VI/19277.

乗りを上げ、イタリアも当初これを支持した。これに対してDAFは、1940年のオリンピックが東京に代わりヘルシンキで開催されることとなったため、オリンピックとWRCの連携を確保する観点から、ヘルシンキから地理的にも近いスウェーデンの首都ストックホルムでの開催を主張した。ロンドンのWRC国際評議委員会では、OND指導者のプッチェッティもDAFの主張の支持に回り、ストックホルムが第4回WRCの開催地に選ばれたのである[66]。

ライは、ロンドンでWRC国際評議委員会が開催された翌月、第4回WRCへの参加準備のためKdF幹部および関連諸団体の代表によって構成されたIZBドイツ特別委員会において、すでにスウェーデンで独自の余暇の組織化が進んでいるため、「再び大きな成果を収めるために、われわれは総力を結集し」、「格段の特殊性を発揮しなければならない」と訴えた[67]。だが、「独裁的統治諸国家における余暇運動の制度」が自国民の目に触れることを忌避するスウェーデンの政権与党社会民主党はストックホルムでのWRC開催に強く反発し、開催の実現が危ぶまれた[68]。DAFはスウェーデン世論の支持を取りつけるため、同国の複数の余暇組織の代表者を第5回KdF全国大会に招待し、KdFに対する認識を改めさせようと画策したが奏功しなかった[69]。南東欧地域での「歓喜と労働」移動博覧会の舞台裏で試みられた、北欧へのKdF余暇モデル輸出のための橋頭堡構築の苦戦は、同モデルの輸出可能性の限界を示唆するものであったといえよう。

おわりに

1938年5月から1939年6月にかけて南東欧諸国で開催された一連の「歓喜と労働」移動博覧会は、「歓喜と労働の世界同盟」の結成を通じて、余暇の組織化をめぐる国際的イニシアティブの獲得をはかるDAFの対外戦略のなかで枢要な位置

66) Tagung des Internationalen Beratungsausschusses in London am 6., 7. und 8. Februar 1939, in: BAB NS 5-VI/19277; Liebscher (2009), S. 598f.
67) Tagung des Deutschen Arbeitsaussusses für den Weltkongreß Freude und Arbeit (DAK: Deutsche Arbeitskorrespondenz vom 16. März 1939), in: NS 5-VI/19277.
68) Bericht über die Wahl Stockholms zum Tagungsort des nächsten Freizeitkongress (auf Grund skandinacischer Pressenachrichten), in: BAB NS 5-VI/19277.
69) Herr Låftmann bittet zu einem deutschen Kongress (Übersetzung aus Sozial-Demokraten vom 13. Juli 1939), in: BAB NS 5-VI/19277.

を占めた。「世界同盟」構想の主眼は、IZB を ILO の国際労働事務局に代わる国際社会政策の中核組織へと昇華させることにあったが、同時に余暇の組織化の先駆者である OND の影響力を抑え、全体主義陣営内部においてヘゲモニーを掌握することが企図された。

こうした観点からすると、対抗勢力である ILO の強力な支持母体であったフランスが参加したブカレストでの第 3 回移動博覧会が、DAF の国際的プレゼンスが「頂点」に達した時であったといえよう。第 3 回 WRC での「世界同盟」の実現は果たされなかったものの、3 度にわたる移動博覧会の開催は、並行して開催された KdF 全国大会の影響とあいまって、南東欧諸国において KdF がめざすべき余暇モデルとして認識される上で大きな役割を果たしたのである。「国王独裁体制」の下にあったギリシア、ブルガリア、ルーマニアでは博覧会の開催にあわせて国民的な余暇組織が「上から」結成されたが、このことは、独伊のみならず、独裁レジームにとって余暇の組織化が国民統合の「有効な」手段として認識されていたことを示唆しているといえよう。

また移動博覧会の開催は、KdF クルーズを通じた南東欧諸国との「大衆外交」を始動させる契機ともなった。DAF の「世界同盟」構想にとって不可欠な手段として位置づけられた「大衆外交」の本格的な起点は 1937 年のライ・チャネッティ協定によって実現された独伊間の労働者交流事業や、KdF クルーズによるイタリア周遊旅行に求められ、ギリシアおよびユーゴスラヴィアへの KdF クルーズの就航はその延長線上に位置づけられる。従来の先行研究では、KdF クルーズは、それまで一部の社会層しか享受しえなかった国外旅行を労働者層にも提供する「旅の民主化」を通じて「民族共同体の調和」をはかるとともに、クルーズ参加者に第三帝国の将来的な版図を実際に見分させ、ナチ・レジームの対外膨張政策への同意を取りつけるための対内プロパガンダ手段として理解されることが多い[70]。だが、トランスナショナル・ヒストリーの視点からすると、「歓喜と労働」の旗印の下に、反 ILO と「ボルシェビズム打倒」へと国際世論を誘導するための手段として捉えられるのであり、それに対する移動博覧会の寄与も看過しえない。

---

70) Baranowski (2004), Frommann (1992), Weiß (1993).

南東欧諸国での移動博覧会の「成功」はDAFの野望を増長させ、北欧およびベネルクス諸国へもKdF余暇モデルを輸出することが構想された。だが、その最初の一歩となるストックホルムでの第4回WRC開催の試みはスウェーデン社会民主党の反発から難航し、南東欧地域以外へのKdF余暇モデルの輸出可能性の限界を露呈することとなった。そして第2次大戦の勃発により第4回WRCの開催が幻に終わっただけでなく、1940年末にはIZBが解体され、国際社会デザイン中央局Zentralamt für internationale Sozialgestaltungへと改組される[71]。これにより、第2回WRC以来、DAFの宿願となっていた「世界同盟」構想の制度的基盤そのものが失われることとなったのである。

【史料・参考文献】

I. 未公刊史料

Bundesarchiv in Berlin Lichterfelde（BAB.）

NS 5-VI/6238, 19275, 19276, 19277, 29845, 30301, 39368.

Politisches Archiv des Auswärtigen Amts（PA.）

RZ 408/49233, 49234, 49240, 49245.

Staatsarchiv Hamburg（StAH.）

135-1 I-IV 7505, 7506, 7514.

621-1/95 4649, Teil 2.

II. 同時代定期刊行物

Der Angriff.

Frankfurter Zeitung.

Freude und Arbeit.

III. 同時代文献

Arbeitswissenschaftliches Institut der Deutschen Arbeitsfront（1940）, *Deutschland und*

71）Liebscher（2009）, S. 612f.; Linne（1994）, S. 175.

Südosteuropa, Berlin.

Deutscher Organisations-Aussschuß des Weltkongresses für Freizeit und Erholung（1936）, Weltkongress für Freizeit und Erholung. Hamburg vom 23. bis 30. Juli 1936.

Internationales Zentral-Büro „Freude und Arbeit“（1937）, *Bericht. Weltkongreß für Freizeit und Erholung Hamburg – vom 23. bis 30. Juli 1936 – Berlin*, Hamburg.

Internationales Zentralbüro „Freude und Arbeit“（1938）, *Weltkongreß „Arbeit und Freude“. Rom, Juni/Juli1938. Entschließungen der Kommissionen*, Berlin.

Reichstagung der NSG. „Kraft durch Freude“ vom 20. bis 23. Juli 1939 in Hamburg.

The Royal Institute of International Affairs（1939）, *South Eastern Europe. A Political and Economic Survey*, Oxford University Press（邦訳：仙波太郎訳（1939）『バルカンの政治経済』清和書店）.

保科胤（1942）『国民厚生運動』栗田書店。

IV. 二次文献

Baranowski, Shelly（2004）, *Strength through Joy. Consumerism and Mass Tourism in the Third Reich*, Cambridge University Press.

Buchholz, Wolfhard（1976）, *Die nationalsozialistische Gemeinschaft „Kraft durch Freude“. Freizeitgestaltung und Arbeiterschaft im Dritten Reich*, Dissertation an der Uni. München.

Dafinger, Johannes（2017）, The Nazi “New Europe”. Transnational Concepts of a Fascist and Völkisch Order for the Continent, in: Arnd Bauerkämper/Grzegorz Rossolinski-Liebe（eds.）, *Fascism without Borders. Transnational Connections and Cooperation between Movements and Regiemes in Europe from 1918 to 1945*, New York: Burghahn Books, pp. 243-263.

Elbert, Jürgen（1999）, *Mitteleuropa! Deutsche Pläne zur europäischen Neuordnung (1918-1945*), Stuttgart.

Frommann, Bruno（1992）, *Reisen im Dienst politischer Zielsetzungen. Arbeiter-Reisen und „Kraft durch Freude“- Fahrten*, Stuttgart.

Liebscher, Daniela（2009）, *Freude und Arbeit. Zur internationalen Freizeit- und Sozialpolitik des faschistischen Italien und des NS-Regimes*, Köln.

Linne, Karsten（1994）, „Wir tragen die Freude in die Welt“. Der Hamburger „Weltkongreß für Freizeit und Erholung“ 1936, in: *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte*, Bd. 80, S. 153-175.

Tano, Daisuke（2010）, „Achse der Freizeit“. Der Weltkongreß für Freizeit und Erholung 1936 und Japans Blick auf Deutschland, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, Jg. 58, H. 9, S. 709-729.

Mori, Takahito（2023）, From Hamburg to Osaka? Organising Leisure through Kraft durch Freude and Kōsei Undō, in: Rainer Liedtke/Takahito Mori/Katja Schmidtpott（eds）, *The Making of the 20th Century City. Towards a Transnational Urban History in Japan and Europe*, Franz Steiner, pp. 175-204.

Weiß, Hermann（1993）, Ideologie der Freizeit im Dritten Reich. Die NS-Gemeinschaft Kraft durch Freude, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. 33, S. 289-303.

小野寺拓也（2020）「感情史の視点からみるナチ体制 ―「喜び」の動員と余暇・娯楽―」『みすず』no. 698、12-25 頁。

河合信晴（2015）「余暇史研究における「公」と「私」―ドイツ独裁体制研究を例にして―」『三田学会雑誌』第 108 巻 1 号、131-148 頁。

木村真（1998）「両大戦間期の政治危機」柴宜弘（編）『バルカン史』山川出版社、249-285 頁。

栗原優（1994）『第二次世界大戦の勃発―ヒトラーとドイツ帝国主義―』名古屋大学出版会。

クロッグ，R.（高久暁訳）（2004）『ギリシャの歴史』創土社。

田野大輔（2009）「余暇の枢軸 ―世界厚生会議と日独文化交流―」『ゲシヒテ』第 2 号、21-39 頁。

藤嶋亮（2012）『国王カロル対大天使ミカエル軍団 ―ルーマニアの政治宗教と政治暴力―』、彩流社。

六鹿茂夫（1998）「第二次世界大戦とバルカン」柴宜弘（編）『バルカン史』山川出版社、285-323 頁

村田奈々子(2005)「近代のギリシア」桜井真理子(編)『ギリシア史』山川出版社。
森宜人(2021)「余暇の組織化をめぐるトランスナショナル・ヒストリー ―全体主義的モデルの展開を中心に―」『一橋経済学』第12巻1号、87-129頁。